＜実践報告・調査報告＞

チャット・反応機能を用いたオンライン講義は新たな主体的な学びの形となり得るか ―京都産業大学におけるオンライン講義の実践報告―

椛島　雅弘[1]

本報告は、Teams のチャット・反応の機能を用いたオンライン講義が、主体的な学びの形として有効かどうか検証したものである。報告者は、2020 年度より京都産業大学の「中国古典文学入門」「東アジア思想史入門」をオンライン形式で実施している。その中では、「受動的となりがちなオンライン講義で、どのようにすれば受講生が主体的な学びの場を確保できるか」という問題意識のもと、試行錯誤してきた。その結果、効果的であったのが、「Teams のチャット・反応の機能を用いたオンライン講義」であった。

この方式に基づいて講義を行った結果、2022 年度春学期の学生アンケートによれば、主体的に学べたという受講生の回答を一定数得られた。また、9 割以上の受講生が自らの成長を感じることができたと回答しており、一定の有効性を確認することができた。

キーワード：オンライン、Teams、アクティブラーニング、漢文

1. はじめに

新型コロナウイルスの影響により、2020 年度の大学講義は、従来の対面方式を取ることが難しくなり、オンデマンドやオンラインといった方式が取られるようになった。その後、2021 年度以降は、大学によって対面・オンライン・オンデマンドなど、方式を分けながら実施されている。

オンライン講義における重要な一つの課題として、「いかに受講生が主体的に学べるような講義作り（いわゆるアクティブラーニング）を進めていくべきか」というものがある。これは、オンライン形式が普及するより以前から重視されてきた事項である。例えば、松下（2015）や 溝上（2016）が挙げられる。

一方でオンライン講義においても、物理的な遠さからか、論題として挙がることが多い。実際、現時点（2022 年 7 月時点）で、オンライン講義におけるアクティブラーニングを問題とした実践報告や論文は多く発表されている。

アクティブラーニングの具体例として、グループにおけるディスカッションが挙げられる。Zoom や Teams には、グループを作成する機能が備わっており、容易にグループで議論をすることが可能である。

大角（2021）では、Zoom にてグループディスカッションを実施した報告がされている。具体的な工夫として、はじめる際に自己紹介とポジティブクエスチョンに答えてもらうことや、進行役・タイムキーパー・記録係・全体での発表者という役割を決めるなどが挙げられる。

一方で、Zoom・Teams にはチャット機能や反応を示す機能も備わっており、受講生の主体的な学びに活用させることが可能である。今堀（2021）では、本題に入る前のアイスブレイクの一環として、yes ／ no で選ぶことができる問いかけを行い、好意的な感想を得たことを述べる。

ただし、このような様式での実践報告は少なく、さらなる実践報告や検討が必要である。従って本報告では、後者のチャット･反応の機能を用いたオンライン講義について、自身が京都産業大学にて実践した詳細を紹介した上で分析し、この方式が新たな主体的な学びの形となるのか検討したい。

2. Teams のチャット･反応機能と講義方法について

まず、筆者が実践した内容について詳細に記す。使用したものは Teams で、オンライン形式である。2022 年春学期、京都産業大学の「中国古典文学入門」（47 名）と「東アジア思想史入門」（190

[1] 京都産業大学　全学共通教育センター

名）にて実施した。共に一般教養科目で、様々な学部の学生が参加していた。評価は、毎回のチャットへの書き込み・反応と、講義後に提出するミニレポートをもとに決定する。講義中には、受講生の音声・カメラはオフにし、講義者のみがオンにして進めた。

「中国古典文学入門」シラバス

第１回　テーマ：ガイダンス

授業のスケジュールと概要を確認し、この授業での到達目標や身につく力について説明するとともに、進め方を詳しく説明する。

第２回　テーマ：友情と別れ

魯郡東石門送杜二甫（李白）・送元二使安西（王維）・送王永（劉商）・勧酒（于武陵）を取り上げ、「友情と別れ」について理解を深める。

第３回　テーマ：友情

管仲と鮑叔牙・智伯と予讓・羊祜と陸抗の友情関係を取り上げ、「友情」について理解を深める。

第４回　テーマ：恋愛（『詩経』）

『詩経』の恋愛関係の作品を取り上げ、「恋愛」について理解を深める。

第５回　テーマ：恋愛（唐代）

月夜（杜甫）・無題（李商隠）・寄李憶員外（魚玄機）を取り上げ、「恋愛」について理解を深める。

第６回　テーマ：月と自然

月下独酌（李白）・望月懐遠（張九齢）・対月憶元九（白居易）を取り上げ、「月と自然」について理解を深める。

第７回　テーマ：望郷

静夜思（李白）・江漢（杜甫）・望月望郷（朝衡）・怨詩（王昭君）を取り上げ、「望郷」について理解を深める。

第８回　テーマ：怪異小説（『搜神記』）

『搜神記』を取り上げ、「怪異（不思議な出来事や化け物）」について理解を深める。

第９回　テーマ：怪異小説（『聊斎志異』）

『聊斎志異』を取り上げ、「怪異（不思議な出来事や化け物）」について理解を深める。

第10回　テーマ：道徳

司馬遷『史記』伯夷列伝・『菜根譚』を取り上げ、道徳について理解を深める。

第11回　テーマ：労働と心・幸不幸

帰去来辞（陶淵明）・塞翁が馬（『淮南子』）を取り上げ、「労働と心」「幸福と不幸」について理解を深める。

第12回　テーマ：人生の無常

秋風の辞（漢武帝）・短歌行（曹操）・将進酒（李白）・宣州謝朓楼餞別校書叔雲（李白）を取り上げ、「人生の無常」について理解を深める。

第13回　テーマ：辞世

垓下の歌（項羽）・挽歌の歌（陶淵明）・臨路の歌（李白）・達哉白楽天（白居易）を取り上げ、「辞世」について理解を深める。

第14回　テーマ：人生観

竹里館（王維）・曲江（杜甫）・雑詩（陶淵明）を取り上げ、「人生観」について理解を深める。

第15回　テーマ：社会・政治・戦争

桃花源記（陶淵明）・春望（杜甫）・石壕吏（杜甫）を取り上げ、「社会・政治・戦争」について理解を深める。

「東アジア思想史入門」シラバス

第１回　導入

この授業の概要を提示するとともに、中国思想全般の特質及び時代背景について講義する。

第２回　天の思想

諸子百家の思想背景に存在する天の思想について講義する。

第３回　孔子『論語』の思想（1）―儒家思想①

『論語』を取り上げ、孔子の思想について講義する。

第４回　孔子『論語』の思想（2）―儒家思想②

前回に引き続き、『論語』を通じて孔子の思想について講義する。

第５回　孔子『論語』の思想（3）―儒家思想③

前回に引き続き、『論語』を通じて孔子の思想について講義する。

第６回　孟子『孟子』の思想―儒家思想④

『孟子』を取り上げ、孟子の思想について講義する。

第７回　荀子『荀子』の思想―儒家思想⑤

『荀子』を取り上げ、荀子の思想について講義する。

第８回　韓非子『韓非子』の思想（1）―法家思想①

『韓非子』を取り上げ、韓非子の思想について講義する。

第９回　韓非子『韓非子』の思想（2）―法家思想②

前回に引き続き、韓非子の思想を取り上げ理解を深める。

第10回　『墨子』墨子の思想―墨家思想

『墨子』を取り上げ、墨子の思想について講義する。

第11回　『老子』老子の思想（1）―道家思想①

『老子』を取り上げ、老子の思想について講義する。

第12回　『老子』老子の思想（2）―道家思想②

前回に引き続き、老子の思想を取り上げ理解を深める。

第 13 回　『荘子』荘子の思想―道家思想③

『荘子』を取り上げ、荘子の思想について講義する。

第 14 回　『孫子』孫子の思想（1）―兵家思想①

『孫子』を取り上げ、孫子の思想について講義する。

第 15 回　『孫子』孫子の思想（2）―兵家思想②

前回に引き続き、孫子を取り上げ理解を深める。

Teams には、参加者が自由にコメントを書き込むことができ、また各コメントに「いいね」「ハート」「笑い」「怒り」といった反応をすることもできる。筆者は、これらの機能を活用して講義を進めてきた。

具体的には、まず資料を用意し、その資料を画面共有しながら進めていく（図 1）。レジュメには解説だけでなく、解説に関する質問も同時に掲載し、講義中に質問する。例えば、『論語』の「己の欲せざる所、人に施す勿れ。」という言葉を紹介する際には、現代語訳に加え、「Q：あなたは、自分がされたくないことを他者にしてしまった経験はありますか？有る場合は、どのようなものでしょう？（プライベートに差し支えない範囲でお答え下さい。）」という質問も添える。一通り解説が終わった後、チャット欄で実際に質問し、返答をしてもらう（図 2）。

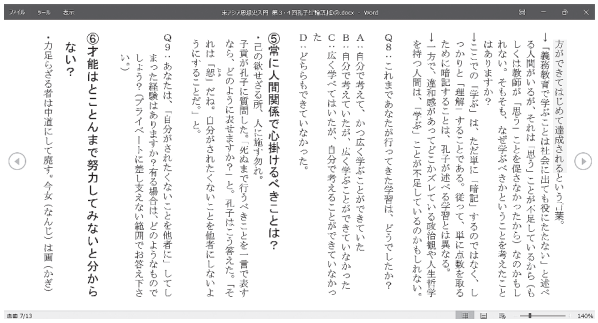

図 1.　講義資料

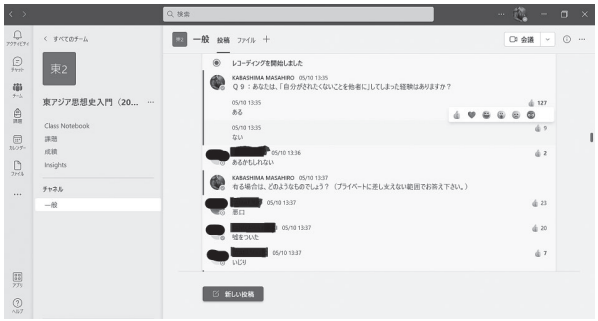

図 2.　Teams での実際の反応

yes ／ no で答えられる質問は、はじめにこちらが選択肢を用意し、当てはまるほうに「いいね」の反応を押してもらうようにする。また、記述が必要な問題については、各自リアルタイムで書いてもらった。また、他の受講生が書いたコメントに共感を覚えた場合や、既に自分が思いついた回答が書き込まれた場合には、いいねを付けてもらった。

質問については、基本的に二種類存在し、一つは「紹介された考え方について、自分はどう思うのか」という質問であり、もう一つは「その考え方に基づいた経験があるのか」という質問である。これは、質問が正解／不正解という基準のないものの方が、受講生が萎縮せず回答でき、主体的な学びに繋がるのではないかという思惑に基づいている。また後者については、回答例をこちらで提示することで、回答しやすくなるよう工夫した。

以上のようなことを実際に行った結果、（図 2）から分かるように、「あなたは、自分がされたくないことを他者にしてしまった経験はありますか？」という質問は「ある」に 127 名が、「ない」に 9 名がいいねを押した。そして、「有る場合は、どのようなものでしょう？」については、「悪口」「嘘をついた」「いじり」が意見として挙がっており、またそれぞれ同意見や賛同者も多く確認できる。なお、これ以降にも沢山の意見が飛び交っており、おおよそ一回の講義で 200 ～ 300 のコメントがチャットに書かれた。

また、以上の質問をした際、講義者自身も回答に参加し、また受講生の意見についてできる限りコメントする。以上のような質問は、1 回の講義あたり 10 回前後行い、解説の時間と質問の時間が同等、もしくは後者が多くなるようにし、できる限り受講生の作業が多くなるよう調整した。

3. 講義に対する評価について

第 1 章で述べた講義法を実施した後、受講生にアンケートを取った。その結果の一部を以下に掲げる。

中国古典文学入門（回答者 35 名）

この講義で学びの面白さを感じた。

強くそう思う→ 24 名　　そう思う→ 9 名

どちらともいえない→ 2 名　　あまりそうは思わない→ 0 名

そう思わない→ 0 名

この講義の学習を通じて、知識を得たりスキルを伸ばすなど、自らの成長を実感することができた。

強くそう思う→17名　　そう思う→16名
どちらともいえない→1名　あまりそうは思わない→1名
そう思わない→0名

総合的にみてこの講義に満足している。
強くそう思う→25名　　そう思う→8名
どちらともいえない→2名　あまりそうは思わない→0名
そう思わない→0名

コメント（一部抜粋）
・毎回の授業を通じて、それぞれ異なるテーマの漢詩を味わいながら、自分の考え方や経験と照らし合わせて考えを深められたことが良かったです。
・ただ話を聞くだけでなくチャットで参加できるのは楽しく、授業に集中することができました。

東アジア思想史入門（回答者145名）
この講義で学びの面白さを感じた。
強くそう思う→90名　　そう思う→51名
どちらともいえない→2名　あまりそうは思わない→1名
そう思わない→0名

この講義の学習を通じて、知識を得たりスキルを伸ばすなど、自らの成長を実感することができた。
強くそう思う→67名　　そう思う→66名
どちらともいえない→10名　あまりそうは思わない→1名
そう思わない→0名

総合的にみてこの講義に満足している。
強くそう思う→85名　　そう思う→51名
どちらともいえない→5名　あまりそうは思わない→1名
そう思わない→0名

コメント（一部抜粋）
・常に質問を投げかけてくださり、いろいろな人の意見が見れてとても面白く受けることができた。
・授業内における反応（チャットに対する反応やコメント）を強制にしているのが良いと思った。強制で無いとみんなの意見がこんなに出ることは無かったと思う。
・リアルタイムのオンライン授業であったが学生の意見をチャットで募り、そのコメントに対して先生が答えてくださっていたので現代の学生にはコメントしやすい環境だったと感じている。
・教員と一体となってする講義に関心を持った。
・オンラインであったが、授業に参加している感じで、チャット機能を用いての授業が他の人の意見を知ることができよかった。
・先生が回答を求めたとき、少しボケたようなコメントが来ても、しっかり拾って笑いに変えていたのがとても印象が良かった。
・質問を多く使い、身近な例を出させることで思想を理解させるやり方は素晴らしいと感じた。
・遠隔授業だが、チャットでコメントする形になるので、対面で意見を発言するよりも発言しやすく非常に講義に没頭しやすい。
・フィードバックが点数だけでなく、文章で返ってきたのがとても嬉しく、課題の提出や講義の出席へのモチベーションにつながった。オンライン授業というより、コメント拾ってくれる生配信という感じで楽しかった。
・チャットでほかの学生の意見をみることができて自分の考えと比較できたり、参考にしたりできることで理解をより深めることができた。
・チャットで回答を集める際に不適切な表現をしている生徒がいれば適宜注意してほしい。真面目に受けている生徒と掲示板感覚で書き込む生徒がいて混乱することもあった・・・。

4. チャット・反応機能のメリット・デメリット

以上のアンケート結果を踏まえ、チャット・反応機能を用いたオンライン講義のメリット・デメリットを箇条書きで挙げて分析したい。

メリット
・自分の意見を発信しやすい。
・非常に多くの意見に触れることができ、視野を広げやすくなる。
・講義者と受講生の一体感が生まれる。
・受講生が真面目に講義を受けているかどうかがある程度分かる。
・声を出せない環境で受講している学生も問題無く参加できる。

デメリット
・良識に反するコメントや、受け狙いのコメントが書かれる可能性がある。
・回答の時間をじっくり取ることができないため、受講生によっては合わない可能性がある。
・意見が多い場合、全ての意見にコメントを返すことができない。
・正解と不正解が明確な問題を扱う講義では実践しづらい。

メリットの「自分の意見を発信しやすい」につ

いては、特にグループワークと比べた上でのメリットである。Teams や Zoom には「ブレイクアウトルーム」という機能が存在し、気軽にグループを分けることができる。かつて筆者もこの機能を駆使してグループで話し合いをしてもらっていたが、そもそも顔出しを嫌がる受講生が多く、また、うまく距離感を掴めず、班員同士でコミュニケーションを取るのが難しい場合があった。しかし、チャット・反応だとリアクションが多く返ってきた。

「非常に多くの意見に触れることができ、視野を広げやすくなる」に関しても、グループワークと比べた場合のメリットである。グループワークでは、基本的にランダムに班員を分けるが、班員は4～5人ほどしかおらず、また能力や意欲によっては、ほとんど意見が出ずに終わってしまうこともしばしばであった。一方、チャット・反応機能だとこの問題は起こりづらい。

「声を出せない環境で受講している学生も問題無く参加できる」については、前後に対面の講義があり、大学の図書館やカフェスペースでオンライン講義を受講している人が一定数存在しているため、非常に重要であった。このような状況だと、グループワークの実施自体が困難となってしまうが、チャット形式であれば問題無く実施できる。

デメリットの「良識に反するコメントや、受け狙いのコメントが書かれる可能性がある」については、実際にそのようなコメントが講義中に書かれることがあった。このあたりは、受講生のモラルに頼っている部分があるが、あまりに度が過ぎている場合は、注意する必要があると感じた。

「回答の時間をじっくり取ることができないため、受講生によっては合わない可能性がある」については、書かれた受講生の意見にある程度コメントするので、そこまで進行が早いという訳ではないものの、一部の受講生からは早いという感想をもらった。この場合は、「すぐに思いつかない場合は、無理せずに他のコメントを読んでいいねを押し、後で思いついたものがあればレポートで書いて下さい。」とフォローして対応すれば、おおむね問題無いと思われる。

「正解と不正解が明確な問題を扱う講義では実践しづらい」については、例えば語学のような講義において、作文や翻訳をチャットへ自由に書き込むというのは、恐らくグループワークで発表するより心理的なハードルが上がる。従って、講義の内容によっては、チャット・反応機能の方式は導入しづらい側面が存在する。

最後に、「学びの面白さ」「自らの成長」「満足度」という三つのアンケート項目について、いずれも肯定的な意見が大半を占める点に注目したい。無論、これらの回答は、様々な要因による総合的判断であるため、短絡的にチャット・反応機能の成果だと断定することはできない。ただし、コメントでこの形式について評価をされていることから、チャット・反応機能と「学びの面白さ」「自らの成長」「満足度」の間に、一定の因果関係を認めることができる。

また講義者の体感としても、チャット・反応機能の活用により、オンラインながら受講生が主体的で活気のある講義になっているのではないかと考えている。

5. まとめ

オンライン講義における主体的な学びの形として最も一般的なものはグループワークである。一方で、報告した通り、チャット・反応機能を用いた方式も、充分に受講生の主体性を発揮し、学びを深められることが実証できた。今回は漢文学を題材として実施したが、内容によって柔軟に工夫すれば、充分チャット・反応機能を活用することは可能である。今回の実践で感じたデメリットへ対策していくと共に、今後、機会があれば、漢文学以外のチャット・反応機能を用いた講義のあり方についても考えていきたい。

謝辞

授業アンケートにご協力頂いた学生の皆さんに感謝申し上げる。

参考文献

今堀洋子（2021）「オンライン授業（ライブ型）におけるアクティブ・ラーニングの可能性―2020年度の地域創造学部での授業実践を振り返って―」『追手門学院大学地域創造学部紀要』6：1-21

松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房，東京

溝上慎一（2016）『アクティブラーニングの技法・授業デザイン（アクティブラーニング・シリーズ）』東信堂，東京

大角玉樹（2021）「オンライン講義におけるアクティブラーニングの試み – コロナ禍における教育のデジタライゼーションと講義デザイン –」『琉球大学経営研究』1（1）：50-59

Can online lectures using chat and reactions be a new form of independent learning?: Practical Report on Online Lectures at Kyoto Sangyo University

Masahiro KABASHIMA[1]

This report verifies whether online lectures which use the chat and reaction functions of Teams are effective as a form of independent learning. Lectures on “Introduction to Chinese Classical Literature” and “Introduction to the History of East Asian Thought” have been carried out in an online format since 2021. During this time, a trial-and-error approach has been taken to the question of “How can we ensure a place for students to learn independently in online lectures, which tend to be passive?” As a result of this, online lectures using the chat and reaction functions of Teams were effective. The result of holding lectures based on this method was that in student questionnaires in the spring semester 2022, a number of students responded that they could learn independently. Moreover, over 90% of students responded that they were able to feel their own development and a certain effectiveness could be confirmed.

KEYWORDS: Online Schooling, Teams, Active Learning, Classical Chinese

2022 年 11 月 25 日受理

1 Center for General Education, Kyoto Sangyo University